

カンボジア王立農業大学獣医学部での国際チームによる 教育支援活動

大澤健司[†] (宮崎大学農学部獣医学科産業動物臨床繁殖学研究室
教授)

直井昌之 (直井動物病院病院長)

木村順平 (ソウル大学獣医学部獣医解剖学研究室教授)



大澤 健司

はじめに

カンボジアはインドシナ半島南部に位置し、国の北側をタイ及びラオス、東側をベトナムとそれぞれ国境を接する仏教国である。国連の定義では同国は後発開発途上国と位置付けされているものの、過去 20 年にわたり安定した経済成長を続けている。農業国とはい

え特に首都プノンペンでは伴侶動物を飼う世帯も増えている。王立農業大学 (Royal University of Agriculture : RUA) 獣医学部は同国における唯一の獣医学教育機関であり、2012 年に設立された新しい組織である。日本を含む複数の海外の獣医系大学と協定を結び、留学経験を有する大学教員数も増えてきているが、同大学の獣医学教育内容のさらなる充実が望まれている。

2023 年 2 月 7 日、8 日の 2 日間、プノンペンの RUA 獣医学部にてキャパシティ・ビルディング・ワークショップ (Capacity Building Workshop) (図 1) と称する特別授業を実施したので報告する。

カンボジアの獣医学教育

アジアには複数の国際的獣医系組織が存在する。その一つがアジア獣医師会連合 (FAVA) であり、現在、中東を含むアジアの 23 カ国 24 機関がメンバーとなっている。昨年 11 月には日本 (福岡) で大会が開催されたことからご存じの読者も多いだろう。大学関係ではアジア獣医大学協会 (AAVS) があり、東アジア、東南アジア、及び南アジアの 17 カ国の獣医系 52 大学がメンバーである。また、これとは別に東南アジア獣医大学協会 (SEAVSA) という組織もある。RUA は 2013 年に AAVS と SEAVSA 両方の組織に加盟しているが、カンボジアは FAVA には未加盟である。同国における高度職業人 (プロフェッショナル) としての獣医師、そして

獣医師会の活動はまだ始まったばかりである。今後、カンボジア社会における獣医師の役割と貢献が益々大きくなっていくためにも、まずは大学における獣医学教育の充実が重要である。

RUA は 10 学部から構成され、獣医学部はその一つである。獣医学部のカリキュラムは 4 年制 (155 単位) と 6 年制 (216 単位) のプログラムがあり、4 年制を修了すると獣医学士 (BSc in Veterinary Medicine) が、6 年制を修了すると Doctor of Veterinary Medicine (DVM) の学位が授与される。ただし、4 年を修了して次の 2 年間に進学する学生はごく少数であり、1 割に満たないとのことである。DVM コースの設立から 3 年ほどしか経過していないということもあり、DVM 取得のメリットが十分に学生に伝わっていないことも一因だろうが、現状では 4 年制を卒業したら同国では獣医師として仕事に従事できることが DVM への進学率が低いことの最大の原因であろう。

学部教育におけるコアカリキュラムは WOAHA が掲げる Day 1 Competencies (獣医師としての資格を得た初日において備えておくべき知識や技能、及び態度に関する総合能力の最低基準) に沿うことを目標としており、そのように構成されている。ただし、立派なカリキュラムが作成されていることと、それが実際にきちんと履行されているかどうかは別問題である。RUA 獣医学部では世界銀行の資金援助により、来年度の完成を目指して新しい学部附属動物病院が建設中である (図 2)。しかしながら、同学部は人材も設備もまだまだ不足している。アジアにおける獣医学教育の底上げのためにはカンボジアとの国際協力が非常に重要である。

キャパシティ・ビルディング・ワークショップ

本ワークショップの目的は学部学生に対して獣医学、特に臨床に有用な知識とスキルを強化する機会を提供すること、及び学部教員に対しても有用な知識とスキルを

[†] 連絡責任者：大澤健司 (宮崎大学農学部獣医学科)

〒 889-2192 宮崎市学園木花台西 1-1 ☎・FAX 0985-58-7787 E-mail : osawa@cc.miyazaki-u.ac.jp



図1-1 講師（リ教授と直井）と学生の集合写真（附属動物病院前にて）

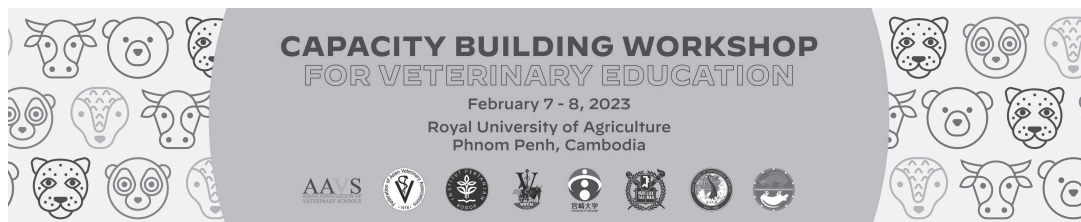


図1-2 キャパシティ・ビルディング・ワークショップのパナー



図2 建設中の新附属動物病院の完成予想図



図3 2019年の実習のーコマ
犬の身体検査に関するデモ（直井）

強化すると共に、それらの指導法についても身に付けてもらうことである。

本ワークショップの講師は複数の国の大学教員及び獣医師から成る国際チームである。この活動は、アジア保全医学会の場で会長の木村が、同学会に出席していたRUAの大学教員から教育支援の相談を受けたことがきっかけで始まり、2016～17年に木村が単独で家畜家禽解剖学の講義と実習を2年続けて実施した。2018年から直井（図3）、インドネシア・ボゴール農科大学の

バンバン・ボンジョ教授、そしてマレーシア・プトラ大学のルーベン・シャルマ教授が加わった、その後、コロナ禍で中断していたものの、今年になって活動を再開した。今回の参加者は木村（解剖学）、直井（外科学）、大澤（繁殖学）の他、ソウル大学のリ・インヒョン教授（外科学・麻酔学）、ボゴール農科大学のバンバン教授（病理学）の計5名であった。バンバン教授は現在、FAVAの事務局長も務めている。ちなみに、リ教授は帯広畜産大学にて、バンバン教授は宮崎大学にてそれぞれ

表 今回の活動日程

2月7日	午前	開会 挨拶 (RUA 獣医学部長 Prof.Kang Kroesna) 挨拶 (木村) 講義 1: 伴侶動物の一般身体検査 (直井) 講義 2: 麻酔学 (Dr.Lee) 講義 3: 牛の繁殖障害と繁殖管理 (大澤)
	午後	実習 A: 伴侶動物の身体検査と麻酔 (直井 & Dr.Lee) 実習 B: 牛の臨床繁殖学検査・超音波検査 (大澤 & 木村)
2月8日	午前	講義 4: 軟部外科学 (直井) 講義 5: 不妊手術 (Dr.Lee) 講義 6: 病理学総論・鶏の病理 (Dr.Bambang)
	午後	実習 C: 軟部外科学・不妊手術 (直井 & Dr.Lee) 実習 D: 鶏の解剖・病理 (Dr.Bambang & 木村)

* 講義は大講義室にて実施

* 実習 A と C は附属動物病院, 実習 B と D は実習室にて実施

博士号を取得しており、日本とも縁が深い。加えて、宮崎大学とソウル大学との間の教育研究協定に関する交流が縁で、本ワークショップは今回が初参加の大澤にも声が掛かった次第である。

2023年のキャパシティ・ビルディング・ワークショップの内容

ワークショップの内容は表に示すとおりである。RUA 獣医学部の学部学生 (3年生及び4年生) 100名と若手教員3名が受講生として参加し、実施された。初日、2日目ともに午前は全員が集めた一つの講義室において3名の講義を続けて実施し (図4)、午後は附属動物病院と実習室の2カ所 (2つのグループ) に分けて実施した (図5~8)。英語からカンボジア語への通訳を入れた講義と実習だったが、英語力が堪能な学生も少なくなく、英語で質問する学生も複数いた。実習は1グループ50人と大人数ではあったが、普段実施されない内容の授業ということもあり、学生は皆、興味津々という感じであった。たとえば、鶏の解剖学実習では1班約5人ごとに1羽の鶏が準備され、教員のデモにあわせ、班ごとに自分達の手で解剖を行わなければいけない状況だったこともあり、各自が一所懸命に取り組んでいた。

両日ともに実習の遂行に際してはRUAの教員の協力があつたが、若手教員自身にとっても参考、勉強になる機会になったものと思われる。RUA 獣医学部の教員には日本や韓国の大学とのつながりを有している人も少なくない。2018年には麻布大学が「さくらサイエンス」プログラムで、2020年1月にはOIEトレーニングプログラムで東京大学が来日の機会を提供している。また、名古屋大学はRUAキャンパス内に附属農場を設立して長年現地で運営を続けている。名古屋大学に雇用されて



図4 講義室での開催挨拶と講師の紹介

RUA 獣医学部内の研究室にて勤務しているタイ人の教授もいる。さらに、韓国のソウル大学や建国大学で研修を受ける若手教員も少なくない。今回のワークショップに関わった若手教員の一人 (Dr. サラン・チョイ) も韓国の全南大学で修士号を取得しており、このワークショップ実施後の5月にも再度韓国を訪れてソウル大学で研修を受講した (図9)。

受講学生の反応

ワークショップ終了後にRUA 獣医学部の教員が受講学生を対象としてオンラインアンケートを実施してくれた。全体として9割以上が本ワークショップを有用あるいは非常に有用で、よくオーガナイズされていたとの評価であったが、個別の記述回答もあった。その中でも特に以下のコメントなどは、今後の実施計画策定に向けて参考になる項目、そして改善の検討が必要な項目である。

- ・年に一度はこのようなトレーニングの機会の継続が必要である。
- ・2日間だけではなく、3~4日間のトレーニングプログラム策定を願う。
- ・受講人数を考えると実習室のスペースはもっと広い方がよい。
- ・学習効率をあげるためには小人数単位での実習が必要。実習での学びの効率を上げるためにはやはり参加型実習になるような工夫が必要である。教員数対学生数割合 (現状は1:65) の改善も必要である。

継続のための課題

現在、この活動に要するカンボジアまでの渡航旅費やプノンペンでの滞在経費はメンバー各自が自前持ちのボランティア活動である。しかしながら、多国籍から成る大学教員や臨床獣医師が一堂に会し、一つのチームとしてRUAの獣医学教育を支援する形というのはユニークな試みであると同時に、今後のアジアにおける国際協力の一つの形として興味深い事例になると言えるのではないだろうか? 現状では参加メンバーの専門分野が一部



図5 麻酔学実習の一コマ
麻酔前投薬(α_2 作動薬)注射とその作用を説明(リ教授)

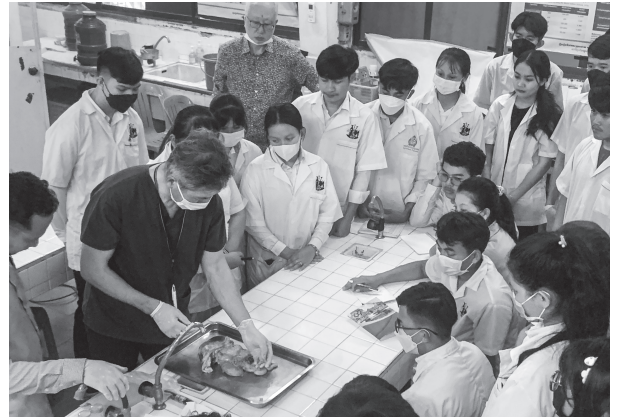


図6 繁殖学実習の一コマ
牛の子宮の解剖と臨床的意義を説明(大澤)

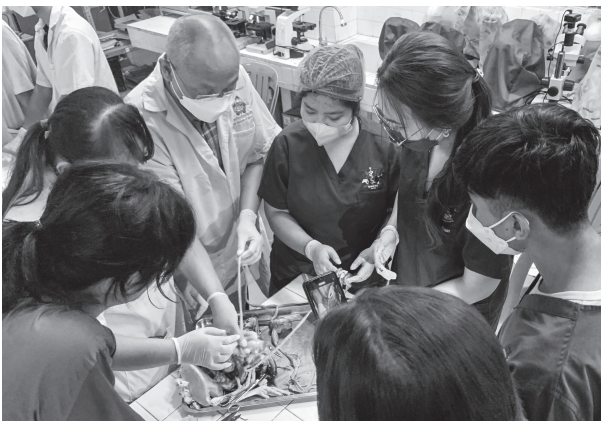


図7 鶏の解剖学実習の一コマ
病理解剖の手順と留意事項を説明(バンバン教授)



図8 鶏の解剖学実習の一コマ
スクリーンにiPadを接続,教材を写して説明(木村)

に限られていて、予算の裏付けがないことが課題である。今後、キャパシティ・ビルディング・ワークショップがカバーできる科目をさらに広げてメンバーも増やしつつ、活動を継続し、発展させていくためにも本活動の趣旨に沿う基金や事業に対して予算申請することを視野に入れる必要がある。今後さらに活発な国際学術交流が進むことが求められている。

おわりに

カンボジアでは皆、挨拶のときに手を合わせ、目が合うと微笑みで返してくれる人が多く、異国の地にあっても日本人にとっては安らぎを感じる場所である。このような穏やかな人々が暮らす国で、つい40数年前に悲惨な歴史があったとはには信じられないが、カンボジアの大学生に教えながら、彼らが熱心に私達の話聴き、手を挙げて質問し、勉学に勤しんでいる姿を見ると、この国の未来のポテンシャルを感じざるを得ない。

最後に、今回のわれわれのカンボジアでの活動報告にあたり、種々の関係資料や写真を提供してくれたRUA獣医学部講師のDr. チイ・ボナに感謝します。



図9 ソウル大学での研修の一コマ
中央、モニターに向かってるのがRUAから研修のために韓国を訪問中のDr. サラン・チョイ